

刀剣の歴史と思想

第7回

酒井 利信

古代朝鮮の刀剣思想

これまで日本刀剣思想のルーツとして、古代中国の刀剣思想に注目してきたが、大きく見渡してみると、これがダイレクトに日本に伝わったというよりは、朝鮮半島でワンクッションあつたと考えるのがどうも適当である。

古代中国と日本の刀剣思想は、同じ系列にありながら、比較すると大きな違いが見てとれる場合があり、不思議な感さえある。しかし、その間に位置するものとして、古代朝鮮半島での刀剣思想を確認すると、この思想の流れをスムーズに理解することができる。

▼▼古代中国から朝鮮へ

剣の思想とは、端的にいって、刀剣を単なる武器としてではなく、神聖なものとして觀念する思想である。古代中国における刀剣思想について、私の考えるその特徴を、ここでいくつかあげておきたい。

まず第一に、神聖視されるのは刀ではなく、ちからほ諸刃の劍である、ということである。武器として使用されてきた状況の推移などがこういった思想を形成した要因であり、このことについては既に述べてきたので再度

繰り返しになるが、再度確認すると、刀の刀剣思想を知ることがここでの主題であるが、われわれの立ち位置からみえる朝鮮の刀剣思想を知ることがここでの主題であるが、われわれの立ち位置からみえる朝鮮刀剣思想の特徴をより明らかにとらえるために、まずはもう一度、古代中国の刀剣思想を全体としてまとめてみるとからはじめてみたい。

確認はしないが、結果として武器としての

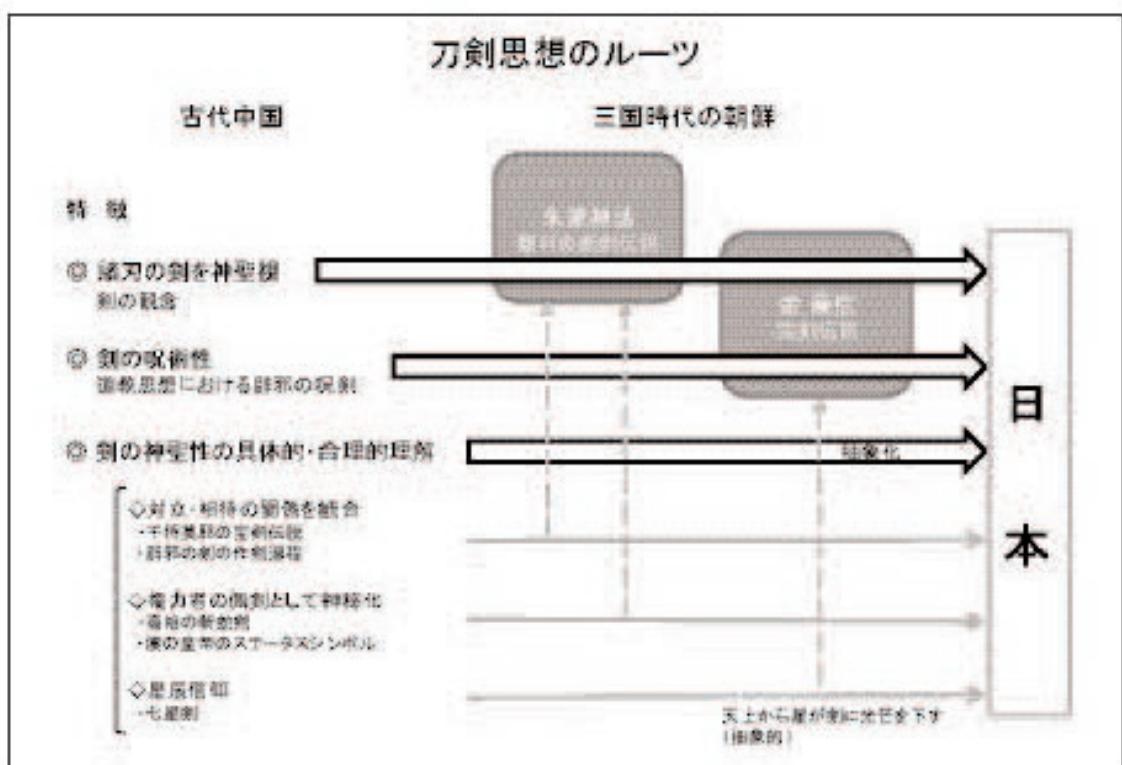
①刀ではなく劍を神聖視
「劍の觀念」



- ②剣の呪術性
辟邪の呪劍
- ③剣の神聖性の具体的・合理的理解
- ・対立相の統合
 - ・権力者の佩劍
 - ・ステータスシンボル
 - ・星辰との関係づけ

刀剣の歴史と思想

古代朝鮮の刀剣思想



刀に対し、道教を中心とした信仰宗教とかかわって剣が特に神聖視された。この思想を、「剣の觀念」といっておきたい。

次に特筆すべき特徴としては、剣の呪術性があげられる。剣は本来武器であったが、その武器としての優秀性ゆえに神秘化され、さらにこれが道教思想の中に入りこむことにより、通常の武器では対処することのできないあらゆる邪悪な存在を排除することができ、そういういた呪力をもつたものとして考えられるようになる。刀に武器としての主役を譲った後、道教思想の中で展開された辟邪の

呪劍としての觀念は、刀剣の思想を大きく深化させたと考えて良い。この剣の呪術性は、後世日本も含めて、東アジアの刀剣思想の根幹をなすものであり、非常に重要な要素である。

さらにもう一つ強調しておくべき特徴は、剣の神聖性について、その根拠を非常に具体的かつ合理的に理解しようとするところである。抽象的、象徴的かつ曖昧な認識の仕方を好む日本とは真逆である。

では古代中国において、剣の神聖性をどう根拠づけていたのかということを、ここで整理しておきたい。それには、三つのタグが確認できた。

執筆してきた順序どおりにあげると、一つは、陰と陽に代表されるような対立・相持の關係にあるものを、剣一つにおいて統合させて、剣を神聖なものと考える思想である。これは、千将莫耶の宝劍伝説や、道教における辟邪の剣を作る描写に頗著であった。

二つめは、漢の高祖の斬蛇剣のように、権力者の佩劍が神秘化され、漢の皇帝に代々受け継がれたように、ステータスシン



ボルにまでなつていくような経緯での、剣の神聖性の認識の仕方である。

三つめは、剣を星と関係づけて神聖なものとする考え方である。これは天命思想からの流れで理解できるものであったが、その方法としては剣に直接北斗七星を彫りこむといった具体的な仕方であつた。

いずれも、剣の神聖性を具体的かつ合理的に理解しようとするものである。

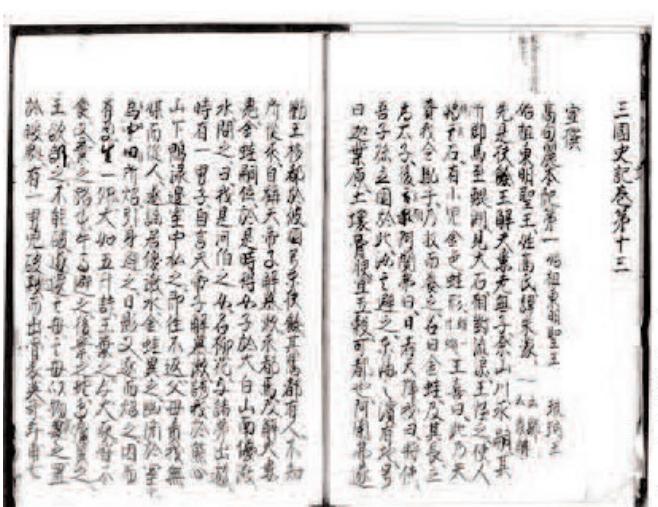
以上のような中国刀剣思想は、朝鮮半島においても基本的には同じ思想文化圏内のものとして展開されるが、程度の差こそあらるもののが朝鮮半島風にアレンジされている。このことが、思考の傾向を異にする古代日本において、単なる金属器としてではなく、その思想をも含めて受け入れることを容易にしたことは間違いない。その意味で、古代朝鮮の刀剣思想を把握しておくことは重要である。(1)

ここで、今回の文献学的扱い所を確認しておきたい。

古代朝鮮半島における刀剣思想を知ることができる史料としては、『三国史記』や『三国遺事』をあげることができる。『三国

三国史記卷第十三

金富軾編纂『三国史記』



乱が続き重要な史料の多くが焼失したことについて、これらの史料に頼らざるを得ない事情がある。先行する研究において、この時代の歴史を考えるには、この二つを取り上げるのが通常であり、両書はその史料的な価値から日本の『古事記』や『日本書紀』に例えられることもある。

▼▼朱蒙神話における断劍伝説

古代朝鮮における刀剣の思想をうかがわせるものとして、まず一つ事例をあげておくと、高句麗の朱蒙神話における類利の王位繼承伝説がある。

以下、『三国史記』にみられる一文である。

初め朱蒙は扶余に在り。礼氏の女を娶りて娠有り。朱蒙帰りて後、乃ち生まる。是れ類利為り。——中略——母曰く、「汝の父常人に非ざる也。國に容れ見えず、逃れて南地に帰る。國を開きて王と称す。帰る時予に謂ひて曰く。『汝が若

刀剣の歴史と思想

古代朝鮮の刀剣思想

し男子を生めば則ち言へ。我遺物有り。
藏して七稜石上の松下に在り。若し能
く此れを得る者は乃ち吾が子也』と』。
類利之を聞く。——中略——礎石に七稜
有り。乃ち柱下を捲る。断剣一段を得。
——中略——卒本に至り、父王に見ゆ。断
剣を以て之を奉ず。王、己の所有の断剣
を出して之を合す。連なりて一剣と為る。
王之を悦ぶ。立てて太子と為す。至りて
是れ位を継ぐ。

れ、南方に逃れてそこで高句麗を建国した
と伝えられている。朱蒙は、将来生まれて
くるであろう我が子のために、剣を一つに
折り、片方を隠した。朱蒙の子である類利
は、父が亡命した後に生まれ母に育てられ
たが、父の遺言により、折れた剣の半分を
探しあて、これをもつて父のもとに行つた。
王となつた父の持つていた断剣と合わせた
ところ一本の完全な剣になつたため、王は
類利を太子として王位を継がせた、といつ
た内容である。

朱蒙とは、高句麗の始祖といわれる東明
聖王のことである。扶余にいたが、弓矢の
技術に長けていたことから王子たちに疎ま
ある陰陽を統一するものであるという思想
が潜在していることは明らかである。干将
莫耶の場合、陰陽二つの剣があり、これが
揃つてることに意味があつたが、ここで
は一本の剣が二つの断剣に分かれており、
これが一本になることに意味が見出されて
いる。対立・相待にあるものを統一する剣
としての姿が、別の形でより明確に描写さ
れてている。

また、剣が王位を継承する際に重要な役
割を果たす点で、高祖の斬蛇剣にみられた
思想の流れがうかがえる。

中国思想における剣の観念が継承されて
いることは確かであり、また古代朝鮮なり



のアレンジもみられる。しかしながら、この型の伝説が日本に伝わり、思想的に深みをおびて発展するといったことはない。

て、新羅・高句麗・百濟の三国が鼎立し抗争を繰り返していた。これを統一するのに絶大な貢献をしたのが、新羅の大将軍であつた金庚信である。

『三国史記』では、金庚信の伝記に三巻

古代中国、朝鮮、日本という思想の流れの中で、私が特に重要と感じているのは呪術の系譜である。この呪術の系譜を古代朝鮮において繋ぐ重要な人物として、金庚信

という人物があげられる。

古代朝鮮では、四世紀から七世紀にかけ

ここでしばらく刀剣から離れて、この思想のキーマンとなる金庚信という人物そのものに注目してみたい。

庚信の出生については、次のような逸話が伝えられている。

舒玄庚辰の夜、熒惑鎮二星已に降りる夢を見る。——中略

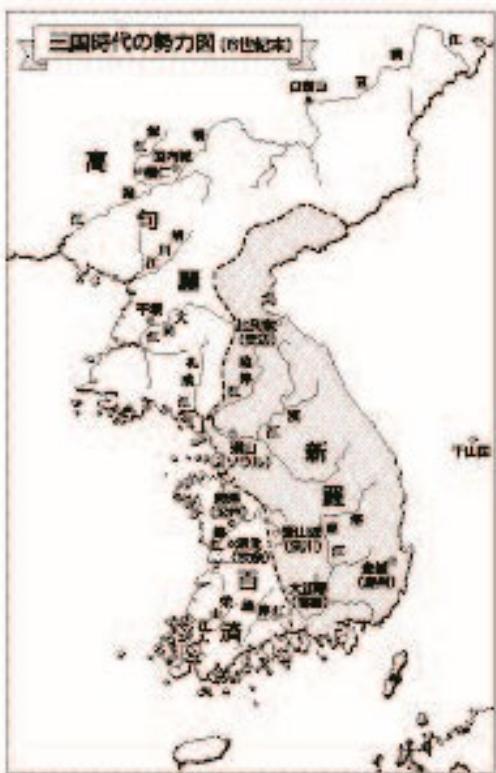
父の舒玄は、庚辰の日の夜に、熒惑（火星）と鎮星（土星）の二つの星が自分に降りてくる夢を見た。母の万明はやがて身ごもり、二十カ月して庚信を生んだ、といつた内容である（父舒玄は、庚辰の夜の吉夢によつてこの子を得られたので、それにちなんで庚辰と名前をつけたかつたが、日月の名はつけないことに礼法になつていたので、庚と似た字の庚と、辰と音が同じ信をとつて、庚信と名付けたことも記されている）。

また『三国遺事』には、「庚信公真平王十七年乙卯に生る。七曜の精を稟く。故に背に七星の文様有り」（庚信は、真平王十七年（五九五）に、七曜の精氣をうけて生まれたので、背中に七星の文様がある）と記されている。七曜とは、日、月と火、水・木・金・土の五星を合わせたものである。

これらの伝説の背景に、星の信仰があることは確かであり、庚信は星の精をうけた英雄として生まれてきた。このことは、後

二十月にして庚信を生む。

父の舒玄は、庚辰の日の夜に、熒惑（火



呪術の系譜

▼▼呪術の流れを伝える

金庚信

古代中国、朝鮮、日本という思想の流れの中で、私が特に重要と感じているのは呪術の系譜である。この呪術の系譜を古代朝鮮において繋ぐ重要な人物として、金庚信

という人物があげられる。

古代朝鮮では、四世紀から七世紀にかけ

ここでしばらく刀剣から離れて、この思想のキーマンとなる金庚信という人物そのものに注目してみたい。

庚信の出生については、次のような逸話が伝えられている。

舒玄庚辰の夜、熒惑鎮二星已に降りる夢を見る。——中略

父の舒玄は、庚辰の日の夜に、熒惑（火星）と鎮星（土星）の二つの星が自分に降りてくる夢を見た。母の万明はやがて身ごもり、二十カ月して庚信を生んだ、といつた内容である（父舒玄は、庚辰の夜の吉夢によつてこの子を得られたので、それにちなんで庚辰と名前をつけたかつたが、日月の名はつけないことに礼法になつていたので、庚と似た字の庚と、辰と音が同じ信をとつて、庚信と名付けたことも記されている）。

また『三国遺事』には、「庚信公真平王十七年乙卯に生る。七曜の精を稟く。故に背に七星の文様有り」（庚信は、真平王十七年（五九五）に、七曜の精氣をうけて生まれたので、背中に七星の文様がある）と記されている。七曜とは、日、月と火、水・木・金・土の五星を合わせたものである。

これらの伝説の背景に、星の信仰があることは確かであり、庚信は星の精をうけた英雄として生まれてきた。このことは、後

刀剣の歴史と思想

古代朝鮮の刀剣思想

に彼の宝剣を語る際に重要な要素になってくる。

父の舒玄も、祖父の武力も優秀な武人であつたようだ。そもそも武人の家系に生まれてきている。また、武烈王の娘を嫁とし、自らの妹を王に嫁がせるなど、王族との関係も親密であった。

庚信は、十五歳で花郎となつていて、花郎という名前は、新羅における愛国心の強い青年貴族の集団で、平時から精神的にも肉体的にも修養を積み、いざ戦いとなると先頭にたつて戦つたという。ここで特に注目すべき点は、花郎が呪術を行う集団であったということである。

『三国史記』には、次のような記述がある。

真平王建福二十八年辛未、公年十七歳、高句麗百濟靺鞨の国境を侵軗するを見る。慷慨して寇賊を平ぐる志有り。独り行きて中嶽石窟に入る。斎戒して天に盟誓を告げて曰く「敵国道無し。豺虎となりて以て我が封場を擾す。略して寧歳無し。僕是れ一介の微臣にして材力量せざるも禍乱を清めんと志す。惟れ天のみ

監を降して手を我に假さん」と。居ること四日、忽ち一老人有り。——中略——

常人に非ざるを知る。再拝して進みて曰く、「僕新羅人なり。國の讐を見て心を痛め首を疾す。故に此に来る。ねがわくは遇わん所有のみ。伏して長者の我が

精誠を憫み、之に方術を授けんことを乞ふ」と。老人默然として言無し。公涙を涕して懇請して倦まざること六七に至る。老人乃ち言ひて曰く「子幼して三国を并する心有り、亦た壯ならざらんや」と。乃ち授くるに秘法を以て曰く「慎みて妄伝すること勿れ。若しそうを不義に用ふれば反りて其の殃を受く」と。

だろう。

こういった呪術宗教的な活動は、多分に

庚信は、単なる英雄ではなく、道教から

の流れをくむ花郎としての呪力をもつ英雄であった。

▼▼庚信の宝剣

この話には、さらにつづきがある。

以下は、金庚信にかかる刀剣の思想を窺うことができる『三国史記』の一文である。

ここには、真平王の建福二十八年（六一）、高句麗、百濟、靺鞨が国境を侵略していくのに憤りを感じた庚信が、中嶽の石窟にこもって斎戒し、天に祈つていたところ、そこに現れた老人から方術を授かつたことが記されている。

建福二十九年、隣賊転じて迫る。公愈よ壮心を激しくす。独り宝剣を携へて咽薄山の深壑の中に入る。香を焼きて天に告ぐ。祈祝すること中嶽に在るが如し。誓辭して仍て禱る。天官光を垂れ靈を宝剣に降す。二日夜、虛角二星の光芒、赫然として下垂す。剣動くこと揺然たるが若し。

建福二十九年（六一二）に隣国の賊軍が

呪力を得るために苦行

て苦行をすることにより、呪術の能力を得る花郎の修行を描写したものと考えて良い



刀剣の歴史と思想

古代朝鮮の刀剣思想

ますます都に迫ってきたため、庚信は激しく心を動かされ、一人で宝剣をもって咽薄山の奥深くに入り、前に中嶽でしたように香をたいて天に祈願した。すると天官神が光を垂れて宝剣に靈氣を降した。さらに三日目の夜に虚星と角星の二つの星が光をあかあかと降すと、宝剣は揺れ動くようであつた、という内容である。

庚信はこの剣をもつて三国統一のために奔走した。

國を治めるに至った英雄の剣にまつわる伝説であるが、高祖の三尺剣の伝説とは異なり、明らかにこの剣には力がある。

この伝説自体は、花郎としての金庚信がシャーマンとしての呪力を得るプロセスを描いたものであるが、この過程において剣が重要な役を担っている。まるでこの剣が庚信の呪力を象徴するかのように。

こういった思考の根底には道教思想があるのであるが、この英雄の出生からすでにそうであったように、道教思想の中でも特に星の信仰と深くかかわっているところに特徴がある。この剣が呪的靈威をもつようになるのは、天官神⁽²⁾のほかに虚星・角

星がその威光をこの剣に下したからである。虚星・角星は道教の基本聖典ともいわれる『抱朴子』に著された呪文に記される星である⁽³⁾。つまり道教の星が、この剣の神聖性の根拠になつているということである。

しかし、星をもつて宝剣の威力を認識するのであるが、古代朝鮮では中国のよう星を直接、具体的に剣に彫りこんだりはない。天命を表す聖なる星が、天上からその光芒を剣に下してくるという、比較的抽象的な描写によって表現されている。そういつた認識の仕方である。

話を先取りすると、日本の刀剣思想では、剣に対する認識はもつと抽象的、象徴的になり、もつと荒唐無稽な話の中で表現されるようになる。

また、中国にはなかつた、聖なるものが天上から地上に降りてくるという、思考の型を形成している点でも、この伝説は重要である。この思考形態は、古代日本に多大の影響を与えることとなる。

三品彰英『建国神話の諸問題』平凡社、一九七七
(2) 道教の神である三官(天官・地官・水官)の一つ。
(3)『抱朴子』雜應篇には、「刀は大房と名づけて、虚星を司り、——中略——は大傷と名づけて、角星之を主り」と記されている。

これまで古代中国、朝鮮と、日本の刀剣思想のルーツを探る旅を読者諸賢とともにしてきたが、これはひとまず今回で終了となり、次回からいよいよ古代日本に旅の舞台を移していくことにする。

ジョンおいたのが、この金庚信伝説である。

刀剣を神聖視する思想において、中国・朝鮮・日本を繋べ、言いかたを換えれば、日中の橋渡しをする思想がここには残っている。